

新しい時代の到来と父親支配の終焉

- - 『ドンビー父子』を中心に - -

松村豊子

1 父親支配の衰退とその社会的必然性

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の『ドンビー父子』は1846年10月から48年4月にかけて月刊分冊されたが、その正式な表題は『卸売り、小売り、輸出業ドンビー父子商会との取り引き』(*Dealings with the Firm of Dombey and Son, Wholesale, Retail, and Exportation*) である。この表題から容易に連想される内容は、1830年代40年代の自由貿易謳歌の風潮を反映した、同父子商会の栄枯盛衰の物語だが、しかし、作品の主眼は栄華を誇る新興商人ドンビー氏の会社よりもむしろ家庭における支配的父親像の見直しにあると言える。何故なら、表題が示唆する「父と息子」の物語は、ドンビー氏と彼が会社の繁栄発展とは無縁の存在として終始疎外する彼の一人娘フロレンスとの「父と娘」の物語を導入するだけに終わっているからである。若い娘が父親から夫の手に財産の一部として譲渡される時を描いた絵画、ジェイムズ・ハウヤの『一人娘』(1875)を引き合いに出すまでもなく、資産家の一人娘が父権制社会では立派な投資対象になることは周知のことだが、この作品の一人娘は父親の投資対象でなく、富と権力を誇る父親が徹底して排除しようとした、新しい未知の価値観を体現している。言い換えるならば、ドンビー氏とフロレンスとの「父と娘」の物語は父親の視点から読むと家庭における父親支配の終焉の物語である一方、彼に疎外される娘の視点から読むと「一人娘」の主題に則った家族の再編成の物語である。

この1,000頁近い超大作の粗筋を家族の離散と再編成という視点からまとめると、次のようになる。生まれて48時間のドンビー氏の一人息子ポールと、長年待ちわびた会社の共同経営者兼後継者の誕生に喜びを隠せない四八才のドンビー氏との対比を揶揄した描写

で始まる『ドンビー父子』の物語は、その後、ドンビー氏の期待をことごとく裏切り、家族に絶対的服従を強いる支配的父親の限界が露わになるように展開する。まず、ドンビー氏は息子の誕生と引き換えに妻を失い、次に息子自身を病気で失う。息子の存在にこだわる彼は、ポールの死から一年足らずで、イーディスという美貌の寡婦と再婚するが、彼女はあろうことか彼が会社経営を全面的に任せていた同商会幹部のカーカー氏と出奔する。妻の出奔に逆上した彼は、フロレンスを出奔に加担したのではないかと責め、彼女に暴力をふるう。一方、フロレンスは、父親に以前から疎んじられていたこともあり、これを機に家出し、元同商会社員のウォルター・ゲイと父親の許可なく結婚する。ウォルターはかつてロンドンの雑踏の中で迷子になった幼いフロレンスを助け、彼女と親しくなるが、二人の親密さはドンビー氏の気に入らず、ドンビー氏はウォルターに西インド諸島にあるバルバドス支社へ転勤つまり左遷を命じる。ところが、彼が乗船した同商会の持ち船「息子と世継ぎ」号は途中で遭難し、ウォルターは中国貿易に携わる船に救助され、その船会社の社員となる。従って、フロレンスと結婚した時、彼はドンビー父子商会の社員ではなかった。若い二人は結婚後まもなく中国へ旅立つが、二人が本国を留守する1年の間に、ドンビー父子商会はドンビー氏の無謀な海外投資が原因で破産する。経済的・心理的に窮地に追い込まれたドンビー氏を自殺の危機から救うのは、勿論、洋上で生まれた一人息子ポールを連れ、夫ウォルターと共に帰国するフロレンスである。ドンビー氏が息子の誕生を契機に夢見たドンビー王国建設の夢は、このように家庭内反乱とも呼べる妻イーディスと娘フロレンスの離反によって無残にも砕け散るが、彼は娘一家との再会によって家庭の平和を取り戻す。

家族の離散・再編成のテーマはこの作品に限らずディケンズの他の作品でも繰り返されるが、ドンビー氏のように傲慢で支配的な父親は他の作品にはほとんど登場しないし、また、イーディスやフロレンスのように出奔・家出という形で父親支配に逆らう妻も娘も見当たらない。ヴィクトリア朝の女性に厳しい性道徳基準が課せられたことは有名で、女性の性的逸脱行為（典型的な例は婚姻外性交渉だが、父親あるいは夫の元を彼らの許可なく

去る出奔・家出も婚姻外性交渉につながる誘因とみなされた)は小説では死・家長による幽閉・移民等の社会的抹殺をもって贖うべき道徳的大罪として描かれる場合が多い。¹しかし、この作品では、会社だけでなく家族や家屋敷まで失い、悲嘆のどん底に落ちるドンビー氏とは対照的に、彼の元を去った二人の女性が「墮落した女性」の運命をたどることはない。イーディスは事件後母方の従兄弟フィーニックス卿の元へ身を寄せ、ヨーロッパの片田舎で隠遁生活をおくり、他方、フロレンスは相思相愛の相手ウォルターと結婚する。家出、植民地渡航、洋上出産等と言ったフロレンスの行為が他のディケンズの作品あるいは同時代の他の作家のヒロインのそれと比較にならないほど淑女の行動規範から逸脱しているにもかかわらず、彼女がハッピーエンドをもたらすヒロインになった背景の一つは、作者ディケンズが父親の絶対的支配を個人の意志が尊重される「自由の時代」においても法的社会的に成立不可能なものとみなしていたことだろう。

次に挙げる三つの近代化は物語の展開に大きな影響を与えたと思われ。

a) 相続法の近代化 ドンビー氏が息子の誕生にこだわるのは、ドンビー父子商会の世襲制をゆるぎないものにしたいからにほかならない。ところが、1837年の遺言法の制定により、世襲財産制度は廃止され、世襲制は既に時代遅れの代物になりつつあった。この遺言法は1832年の議会改革(一般に第1次選挙法の改革として知られる)が産んだ副産物の一つで、この結果、中世以来遺贈不可能だった土地も遺贈できるようになったばかりか、個人の自由意志を表す遺言による相続は無遺言相続(法廷相続)に優先されることになった。遺言がない法廷相続では、財産の遺留分は妻子がいる場合、妻に三分の一、子供に三分の一(子供がない場合は妻に二分の一)で、残りの三分の一ないし二分の一は死者分として遺言の対象とされていた(四宮 42)。しかし、三七年の遺言法の制定により、資産がある者は動産であれ不動産であれ、彼ないし彼女の自由裁断で資産を処分できるようにわけである。時代はまさに相続の自由化(単独相続から共同相続、男子優先から男女平等)へ向かっていた。娘を無視し、息子だけを重視するドンビー氏の態度は法律の自由化に逆行し、遺言の自由を逆手に取り、自らの自由意志で娘への財産分けを拒否し、世襲制を維持

しようとしている。

ドンビー氏が同家に葬式・結婚式の度に遺言を書き換えていることは、彼の妹チックス夫人のさりげない言葉から明らかであろう。彼女が我が子を顧みず、ドンビー家の跡取り息子の世話に明け暮れるのも、彼女がドンビー氏からそれ相当の財産分けを期待していることなのである。彼女が常に口にする「フロレンスはドンビー家の人間になれない」という言葉の意味は、単にフロレンスの愛情が父親に受け入れられないというだけでなく、フロレンスに遺産を分ける意志がドンビー氏に全くないということでもある。

b) 社会的契約としての結婚 当時、女性の法的権利・財産は結婚と同時に夫のものになったので、既婚女性が法律上は存在しない「陰の女性」(*feme covert*) と呼ばれたことは周知のことである。では、一度結婚してしまうと、女性には一切発言権がなかったのかというと、事実はそうではない。自由契約が推奨されるようになった 1830 年以降、結婚はもはや破棄できない誓約でなく、解約可能な契約とみなされるようになった。従って、夫の妻に対する支配権は絶対的でなく、個々の事情に応じて制限されるべき相対的なものと一般に考えられるようになった。勿論、これと平行して、妻の服従にも限度があるとみなされた。つまり、法律的な男女不平等とは別に、エドワード・ショーターが『近代家族の形成』でロマンチック・ラブと呼ぶところの、男女双方の合意と愛情とを前提する友愛結婚観が当時一般に流布していたのである(ショーター 7)。イーディスのドンビー氏に対する不服従にはこのような社会的コンテクストがあったのである。彼女が結婚を解約可能な契約と考えていたことは、彼女が出奔の際、結婚前にドンビー氏と交わしたマリッジ・セツルメント(婚姻に際し、通常花嫁の父と花婿の間で交わされる財産分与の取り決めで、結婚後に夫から妻に支払われる小遣銭‘pin-money’の額も決められた)の証書を彼の元に残すことから明らかである。

ところで、妻に絶対服従を誓わせようとするドンビー氏とあくまで彼の支配に反抗するイーディスとの結婚生活が破綻するのは当然なのだが、彼女は出奔という過激な手段に訴え結婚生活に終止符を打つ前に、別居という比較的穏便な婚姻解消方法を考える。

“Good Heaven, Mrs. Dombey!” said her husband, with supreme amazement, “do you imagine it possible that I would ever listen to such a proposition? Do you know who I am, Madame? Do you know what I represent? Did you ever hear of Dombey and Son? People to say that Mr. Dombey - Mr. Dombey! - was separated from his wife! Common people to talk of Mr. Dombey and his domestic affairs! Do you seriously think, Mrs. Dombey, that I would permit my name to be handed about in such connection? Pooh pooh, Madame! Fie for shame! You’re absurd.” (DS 549)

イーディスの別居の申し出に対し、ドンビー氏はこのように別居は社会的地位がある男性には沽券にかかわるだけでなく、社会的信用を失うことにもなる一大スキャンダルだと言って全く取り合わない。勿論、イーディス自身も別居を全面的に肯定しているわけではない。継母であるにもかかわらず、盲目的な愛情と信頼を交換できるフロレンスに対し、常に自らを恥じるところから判断すると、イーディスはドンビー氏に対してだけでなく、彼女自身にも鎮めがたい怒りを感じていることがわかる。

ここで興味深いことは、ドンビー夫妻が恥ずべき事として特別視している別居が当時めじらしくなかったことである。一八五七年の離婚法の成立によって、女性も離婚を申請できるようになったが、実際の離婚件数がきわめて少なかったことは周知のことである。² 離婚条件が厳しく、手続きが複雑で、しかも、費用がかかりすぎたからである。しかし、離婚が難しかった反面、別居は比較的簡単にできた。ヴィクトリア朝の別居事情を裁判記録に基づき、ヴィクトリア朝の別居事情を検証するオリヴィア・アンダーソンは次のように言う。別居には当事者及び夫婦それぞれの弁護士だけで条件を決める私的別居と、裁判所で条件を決めるか、または、正式の契約手続きをふむ法的別居の二種類があった。スキャンダルを避けるために、法的別居よりも私的別居が利用された確率は高かったと思われるが、しかし、別居の登録は義務付けられなかったため、正確な件数を知ることはできな

い。離婚手続きの複雑さを相殺するかのよう、別居手続きが一九世紀を通じて年々簡素化されたことから推すと、その推定件数は実に夥しい数字になることは間違いないだろう (Anderson 163)。ちなみに、ディケンズ自身も一八五八年に妻と別居している。

c) 権威の移行：父親から兄弟へ フロレンスの家出・結婚・中国への旅は、父親支配の見直しという大前提がなければ、流刑地オーストラリアへ旅した元売春婦アリス・マーウッドの物語のヴァリエーションの一つになったにちがいないが、フロレンスは我が身を守るべき父権の権威を父親から兄弟へ移し、弟ポールを介して「兄」ウォルターと正當に結婚する。ポールが幼く、しかも、夭折するので、この権威の移行には無理があるのも否定できないが、ディケンズはポールに生前一度だけ会社の共同経営者として投資させ、この権威の移行に信憑性をもたせている。孤児であるウォルターの育ての親、ソロモン・ギルズが経営する船道具店が破産の危機に陥った時、ウォルターは恥を忍んで、ドンビー氏に借金を申し込み、ドンビー氏はこれを息子に富の力を教える絶好の機会だと判断し、息子との共同出資という形でギルズの借金を肩代わりする。

“Dombey and Son,” repeated his father. “Would you like to begin to be Dombey and Son, now, and lend this money to young Gay’s uncle?”

“Oh! If you please, Papa!” said Paul: “and so would Florence.”

“Girls,” said Mr. Dombey, “have nothing to do with Dombey and Son. Would you like it?”

“Yes, Papa, yes!” (DS 112)

引用下から二行目の “you” はテキストでイタリック体で表示されるが、この “you” とはポールだけでなくフロレンスをも指す。ポールはフロレンスの気持を代弁し、ウォルターにお金を貸すようにドンビー氏に提案し、ドンビー氏もポールを介してフロレンスに返答している。これは父親に疎外された娘が我が意志を弟を介して表す一例であると同時に、ポールが同商会の権威を代表する唯一の例でもある。フロレンスが父親から兄弟への権威

の移行に如何にこだわっているかは、ポール亡き後、彼女がウォルターと兄妹の約束をすることからも明らかだろう。フロレンスとウォルターの疑似兄妹の関係はよく言われるような近親相姦というよりも、父親に疎んじられた娘が法的社会的代理人として兄弟を必要としたという社会的意味の方が大きいと言える。

フロレンスとウォルターの結婚物語をウォルターの視点から読むと、雇い主の娘と結婚したロンドン市長ディック・ウィットティングトンの成功物語にみられるおとぎばなし的要素が拭い去れないが、その要因はディケンズが独善的な父親像に代わる新しい父親像を、前者のアンチ・テーゼとしてしか描けなかったことに求められるだろう。彼の作品のヒーローの大半が孤児であること（デイヴィッド・コパーフィールドやピップはこの典型的な例であろう）、また、ヒロインの父親が幼児なみの社会性しかないこと（リトル・ドリットの場合はこの最たる例と思われる）から判断すると、ディケンズが追求したのは理想的な父親像ではなく、次世代の理想的な結婚の形だったと言えるのではないだろうか。この父親不在の御伽噺的な家族像は革命前後のフランスの群小小説では繰り返しみられるようだが（ハント 53）、フロレンスの結婚の動機付けは、家族の離散と再編成という点からみると、やはり、御伽噺でなく、父親の権威を継承した兄弟の手で夫に譲渡される「一人娘」のものと言わなければならない。

2 家族崩壊の要因：男と女の間の越えられない溝

では、支配的父親を中心にした家族を解体した根本的な要因は一体何だったのか。ニーナ・アウエルバッハはドンビー氏とフロレンスとの対立・離反を父娘でなく、男と女のジェンダー及び性をめぐる対立・離反、つまり、ディケンズの全作品に共通してみられる男女関係の原型としてとらえ、両者の間には越えられない程深い溝があると言う（Auerbach 99）。言い換えると、この作品では、性の境界線の壁があまりに高いので、男女は互いに相手の本音はおろか心情を感じ取ることもできないということである。これは作品の精緻な読み裏付けされた洞察力に富んだ指摘と思われる。アウエルバッハは象徴としての

「時計」と「海」に注目し、ドンビー氏の合理的直線的な価値観の社会的意味を前者に、また、社会的境界線だけでなく生死の境界線をも溶解する、フロレンスの感情崇拜の諸影響を後者に読み込んでいる。しかし、ドンビー家の家族崩壊の根底に性に対する無知と無意識の恐怖があることは、家族関係の分析からも明らかになる。

ドンビー氏がいかに女性の性について無知であるかは、彼が妻イーディスに服従を強いる手段として、カーカー氏を二人の仲介者に選ぶことに端的に表れている。ドンビー氏はイーディスの肉体をおもに跡取り息子を産むための生殖の道具とみなしているため、彼女の肉体が快楽を求める男性の欲望の餌食になる危険性、また、彼女自身がこのような男性の誘惑に負ける危険性に全然気付いていない。イーディスは結婚後も社交期間中は毎晩のように着飾り、夫のエスコートなく、一人で社交界へ出向く。彼女は美貌や淑女の立派なたしなみ（ピアノ演奏等の所謂芸事一般）が有利に結婚する必須条件であると過度に熱心に教えられた結果、自らを買い手を待つ市場の「馬」や「奴隷」と同一視し、自虐的な自己認識に陥っている。故に、彼女の社交界通いはドンビー氏の自尊心だけでなく彼女自身の自尊心に対する挑戦でもあるわけだが、ドンビー氏は彼女の美しく傲慢な外見しか見ず、彼女の心の葛藤はおろか、彼女の振る舞いの道徳的危険性をも皆目理解できない。逆に、彼はこれを克服すべき浪費癖と責め、あろうことか、彼女の肉体を性の快楽の道具にしようと虎視眈々と狙うカーカー氏を夫婦関係の調停者に躊躇なく選ぶ。イーディスはドンビー氏の傲慢と無知に辟易し、また、カーカー氏の本性を見抜いていたため、カーカー氏を利用して首尾よく出奔を偽装できたのだらう。

フロレンスについて言えば、ドンビー氏は子供の頃の娘を無視することはできるが、一〇代半ばに成長した娘の美しさには心引かれる。 ”The sight of her in her beauty, almost changed into a woman without his knowledge, may have struck out some such moments even in his life of pride. Some passing thought that he had had a happy home within his reach - had had a household spirit bending at his feet - had overlooked it in his stiff-necked sullen arrogance, and wandered away and lost himself, may have engendered them.” (DS 423) イーディスとの新婚旅

行から戻ったドンビー氏は初めて娘の美しさに気付き、娘を家庭に幸せと平和をもたらす「家庭の精霊」と認識する一方、妻と娘とを切り離して考えられなくなる。妻と娘の仲睦ましい光景を目にし、彼は二人を母娘でなく姉妹のように感じ、そして、イーディスとの仲がこじれると、二人を同一視し、妻に対する不平不満・苛立ちを娘に対するそれに転嫁する。 ”When had she ever shown him duty and submission?---They had always been estranged. She had crossed him every way and everywhere. She was leagued against him now. Her very beauty softened natures that were obdurate to him, and insulted him with an unnatural triumph.” (DS 470)

「彼女」とはフロレンスを指すが、彼に服従しない「彼女」をイーディスに読み替えた方が自然なほど、ドンビー氏の意識の中では、妻と娘は混同され、分がちがたく結びついている。

父親が年頃の娘の美しさに魅了され、しかも、娘と妻とを同一視するとなると、当然父と娘の近親相姦が連想されるはずなのだが、ここで興味深いことは、父と娘の性関係の可能性に関する限り、ディケンズ自身の認識が極めて曖昧だったことである。ディケンズは父と娘の関係にみられるタブーの要素を熟知していればこそ、読者がこの危惧を抱くのを回避するために、父親でなく兄弟を媒体にした結婚物語をフロレンスに準備したと思われる反面、フロレンスとウォルターの中国旅行はあまりに早急に彼女をドンビー氏の潜在的性欲の対象からウォルターの妻、リトル・ポールの母親に変身させ、この父娘関係から男女間の性的含蓄を消し去る。 ”Papa! Dear papa! Pardon me, forgive me!---I never meant to leave you, and I never thought of it, before and afterwards. I was frightened when I went away, and could not think. Papa, dear, I am change. I am penitent.” (DS 705) 帰国したフロレンスは父親に対する娘の義務の不履行をこのように熱烈に一方的にわびる。結局、家族離散の原因になった性を排除しない限り、家族の再会も再編成もありえないという意味なのだろうが、しかし、父と娘との間の潜在的性関係の浄化を娘の父親に対する義務だけで簡単に片付けてしまってよいのかどうかという疑問は残る。

イーディスの出奔とフロレンスの家出はこのようにドンビー氏の女性の性に対する無知と近親相姦的関心とを表面化する。では、女性たちはドンビー氏を理解したのだろうか。

答えは極めて否定的である。というのも、ドンビー氏は男性だけの競争社会に生きる人物として描かれているから。これを端的に示す例は、裏切ったカーカー氏を追跡するドンビー氏の旅であろう。ドンビー氏は日頃の尊大な態度をかなぐり捨て、自らロンドンの貧民窟を訪れ、無法者から妻の駆け落ち先を聞き出し、目的地がわかると、二人の後を追ひ、馬車、船、鉄道を幾度も乗り継ぎ、国境を越え、フランスへ渡り、再び、イギリスへ戻る。彼の追跡の熾烈さは逃げ惑うカーカー氏の恐怖、疲労困憊、壮絶な死に如実に映し出される。ドンビー氏の追跡から逃れるのに疲れたカーカー氏は、列車に飛び込み、車輪に巻き込まれて死ぬ。この追跡の後、ドンビー氏は周囲の忠告を無視し、無謀な海外投資を繰り返して自社を破産させ、自殺寸前まで追い込まれる。追う者と追われる者、双方に死をもたらず追跡は、この作品では男性社会の熾烈な競争の縮図として描かれているので、女性性は彼らの死闘の誘因にこそなれ、これに介入したり、これを阻止することはない。

ドンビー氏の世界に再び女性が登場するのは、彼が会社も家族も失い、自己乖離をおこした後である。心身ともに瀕死の父親と再会したフロレンスは、父親に愛され保護される娘というより、彼の看護人と言った方がふさわしいのではないだろうか。

3 帝国への復活の旅

ドンビー氏が追跡の旅をしている間、フロレンスは夫ウォルターと共に中国へ往復の旅をする。彼女はこの旅の途中で洋上出産し、一度は捨てた父親の存在の重要性に目覚める。つまり、彼女は夫や息子と新しい家族関係を築くにあたり、古い家族関係（父娘関係）を見直す必要があったのだろう。アウエルバッハが指摘するように、フロレンスの心の葛藤とか迷いといった内的探求は空間上の広がりには置換されるので（Auerbach 97）、ここでは詳細に語られることはない。が、しかし、イングランドから中国へのはるかなる旅路は、彼女が夫によせる絶対的な信頼やこの若夫婦の自由への強い希求を象徴する一方で、自由の代償としての貧困・疎外感・身の危険をも暗示している。

彼らが赴いたアジア海域では、当時、貿易の自由化が急速に推し進められていた。東イ

ンド会社が解体するのは1858年だが、アジア海域における同社の貿易の独占権は既に1820年頃から撤廃されていた。同社の独占は1813年にインドで、1832年に東南アジアで、1834年に中国で撤廃され、各地で自由貿易商人による商工会議所が設立された。例えば、34年にカルカッタと広東、36年にボンベイ、37年にシンガポール、39年にセイロンでそれぞれ商工会議所が設立された。アヘン戦争（1839-42年）は自由貿易をめぐるイギリスと中国との対立から起こったが、他のアジア海域ではその時既に貿易の自由化は始まっていた。

この自由貿易の普及浸透に伴い、イギリスとアジア並びに世界各地を結ぶ輸送交通網も急速に整備された。"Anywhere in the immediate vicinity there might be seen pictures of ships speeding away full sail to all parts of the world; outfitting warehouses ready to pack off anybody anywhere, fully equipped in half an hour." (DS 27) この作品のテキストでもロンドンから海外へ向う輸送機関の発達ぶりはこのように記述されているが、1845年以前にはイギリス・中国間の旅の所要日数は4ヶ月（ちなみにイギリス・インド間の所要日数はこの半分の2ヶ月）だった。しかし、45年に蒸気船による定期航路が開通すると、所要日数はそれまでの半分に削減された（横井 50）。

こういった歴史資料から判断すると、ウォルターが積荷管理者として乗船する船はまる一年かけてロンドンから広東まで往復するので、この船はおそらくユーラシア大陸の西の果てからアフリカ大陸をまわり東の果てに点在する主要貿易港をすべて回ったことになる。また、彼とフロレンスは旅の全行程を船上で過ごしたと思われる。ウォルターが管理した積荷の中には勿論アヘンも含まれていたにちがいないが、作品では取り引きされる商品の具体名はなく、一般に定着していたと思われる楽観的な東洋幻想しか紹介されない。"Just round the corner stood the rich East India House, teeming with suggestions of precious stuffs and stones, tigers, elephants, howdahs, hookahs, umbrellas, palm trees, palanquins, and gorgeous princes of a brown complexion sitting on carpets with their slippers very much turned at the toes." (DS 27) つまり、テキストは旅の具体的な事柄に関しては一切語らず、ウォルターの自由貿易商人としての成功を示唆するに留め、離散した家族の和解に必要な最低限度のこと、

つまり、フロレンスが洋上で新しい家庭を作り、父親との和解を望む程度に苦勞する以外の記述はない。”My little child was born at sea, Papa. I pray to God (and so did Walter for me) to spare me, that I might come home. The moment I could land, I came back to you. [. . .] You will come home with me, Papa, and see my baby. A boy, Papa. His name is Paul.” (DS 706) ディケンズがウォルターの積荷の中で忘れずに言説化する必要があったのは、結局、妻フロレンスと息子ポールだけだったのだ。

このテキストの空白の理由はディケンズが帝国を語るができない、もっと正確に言う、語るに値しない他者とみなしていたからに他ならない。

It is pleasant, coming out from behind the wooden screen that encloses this interesting and remarkable sight (which all she can, should see) to glide upon the mighty signs of life, enterprise, and progress, that the great river and its busy banks present. It is pleasant, coming back from China by the Blackwall railway, to think that WE trust no red rags in storms, and burn no joss-sticks before idols; that WE never grope our way by the aid of conventional eyes which have no sight in them; and that, in our civilisation, we sacrifice absurd forms to substantial facts.” (‘The Chinese Junk’ 102)

これはディケンズが 1846 年 6 月に『イグザミナー誌』 (*The Examiner*) に投稿した記事、「中国船」(‘The Chinese Junk’) からの引用である。彼は同年 5 月に一般公開された中国船 (46 年にイギリス人が購入し、喜望峰を回った最初の中国船) を見学して、近代化や文明の進歩に対応できない程停滞した中国の政治体制や科学技術をこのように揶揄し、イギリスの進歩発展ぶりを称える。こういった中国蔑視がディケンズ個人のものというより一般的な対中国姿勢だったことは想像にかたくない。注目すべきことは、この中国船のロンドン入港時期 (48 年 3 月末) と、この作品の中国旅行の物語が分冊出版された時期 (48 年 3 月、4 月) とがほぼ一致することである。ディケンズは明らかに居心地の悪い中国船の船

室から外へ出た時の開放感とイングランド崇拜が、長旅から帰国したフロレンスとウォルターのものとも一致すると示唆している。

フロレンスはこのように中国への旅において、新しい家族を作り、自由貿易という「自由な世界」を経験し、本国すなわち父親の価値を再認識する。故に、彼女の帝国への旅は離散した家族の再編成には欠かせない背景と言える。

『ドンビー父子』における帝国を家族と言う視点から読むと、父親を中心とした家族の支配と服従の構図が諸々の法的社会的自由化により家庭内では成立不可能になり（実生活では父親支配は依然続いたと思われるが、女性の登場人物を排除できない家庭小説では少なくとも成立不可能と思われる）、娘を媒体とした家族の再構築・権威の継承が小説の主要テーマの一つになるいきさつがある程度まで明らかになるのではないだろうか。この作品の中で最後まで維持される唯一の支配と服従の関係が、ドンビー氏に腹心の友のようにつきまとう、大英帝国のほぼ全域で戦闘にかかわったというバグストック少佐と彼が何処とも知れない植民地から本国へ連れてきた下男「ネイティヴ」との主従（暴力と沈黙）関係であること、また、裏切ったカーカー氏を階級・国境の境界線を越え追跡するドンビー氏の爆発的な破壊力から判断すると、ディケンズに家族の継承に対するこだわりがなければ、帝国へ赴いたのはフロレンスでなくドンビー氏自身になったと容易に想像できる。新しい家族の形成という命題の元に、父親の暴力的支配欲、曖昧で危険な性認識は家庭の中から外へ、さらに、はるか植民地へ排斥されたと言っても過言ではないだろう。

注

本稿は 2000 年度ディケンズ総会（10 月 7 日開催）のシンポジウム「ディケンズと帝国」で口頭発表した原稿と一部重複する。

- 1 但し、一八五〇年以前は性モラルの規制は比較的緩慢だった。このことはこの作品とディケンズの後の作品、例えば、『デイヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50) あるいは『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53) を比較しても明らかである。前者

では、性的逸脱者に限らず、社会的不適応者はすべてオーストラリアへ半ば強制的に移
民させられる。また、後者では、私生児の屈辱感と劣等感がヒロインの視点を通して綿々
と語られる。幽閉・死について言えば、W.コリンズの『白衣の女』(*The Woman in White*,
1859-60) を筆頭とする 60 年代に一大ブームをまきおこしたセンセーション小説では、
必ずと言っていいほどこういった社会的排除がテーマの一つになっている。

- 2 1857 年の離婚法制定にもかかわらず、離婚申請条件が厳しく、また、諸経費が高かつ
いたので、離婚件数はきわめて少なかった。これについては拙稿「重婚小説の方程式
(1) : 重婚の社会的必然性」(津田塾大学言語文化研究報 13 号 1999 年) を参照。

引証文献

Anderson, Olive. "State, Civil Society and Separation in Victorian Marriage" *Past & Present*. No. 163
1999.

Auerbach, Nina. "Dickens and Dombey: A Daughter After All" *Dickens Studies Annual* 1976.

Dickens, Charles. *Dombey and Son*. Oxford: Oxford Univ. Press, 1999.

Dickens, Charles. "The Chinese Junk" *Dickens' Journalism*. ed. Michael Slater, London: J. M. Dent,
1996.

ハント、リン . 『フランス革命と家族ロマンス』西川長生他訳、東京、平凡社、1999 年。

四宮和夫 「近代的相続制の成立とその背景」『相続 家族問題と家族法 VI』東京：酒井
書店、1980 年。

ショーター、エドワード . 『近代家族の形成』田中俊宏訳 東京：昭和堂、1991 年。

横井勝彦 『アジアの海の大英帝国』東京：同文館 1988 年。